

母の 639 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

ぼろり家族④ お父さんと／落合由利子 2
わたしが読んだ童心社の本⑤／小松崎進 3
私と沖縄／石川文洋 4-5
新刊紹介／長谷川知子、大島清昭 6-7
祝「第55回五山賞奨励賞」受賞！ 7

イラスト／村上康成



KATSUODORI
S.M.R.K.M.

ある日、ある時

あまんきみこ

昨日、ある小学校の3年生からきた手紙の束の中に「こんどは中国語でお話を書いてください」という言葉が7、8通入っていて、どきっとしました。20年近く前にも同じような手紙をもらったことがあります。これは、私のことを「旧満州生まれ」と先生に教えられ（ひょっとすると教室の壁に貼られている世界地図で中国東北部をさし示されたかもしれません）、生徒達が明るい声をあげ、その賑やかな会話の中から生まれた手紙の言葉でしょう。先生の笑顔まで浮かぶようです。けれど中国語も知らず中国の友もいなかった私は、不意に80年以上も前に放りだされる思いになって蹲うずくまりました。

私は傀儡かいらいの国、満州で生まれ、子ども時代の殆ほとんどを過ごしました。その国の間違った成立のしかた、その地の人達への迫害の事実を知る度に胸の奥底が痛み、沈みこみます。知らなかった、見なかった、聞かなかった、子どもだったという言葉は消えてしまいます。私は、その時、その地に「いた」のですから。もちろん、そこには、中国語を話すことができ、中国の友達と遊んだり話したりした子達もいたことでしょう。けれど私自身の記憶の中には、それが全くないのです。そのため子どもの頃の楽しさ、喜びが浮かぶと、それはその時代の国家権力の中にあつての安泰であり、豊かさであったことにこだわらずにはいられません。折合いがつかないままなのです。

子ども達の手紙はうれしい。私の宝物です。いつも大きな封筒をひらくと、中から教室の空気が、先生や生徒の話し声、笑い声、よび声とともに立ちのぼってきます。「こんど中国語でお話を書いてください」と書かれた手紙には、可愛い絵が添えられています。この子達にどう返事を書けばいいでしょう。

私は立ち上がって窓をあけました。夏の陽の照りつける濃い緑を見ていると、少しずつ心が落ちついてきます。

72年前の真夏、8月15日に戦争は終わりました。なんと夥おびただしい無念の死があり涙が流されたことでしょう。「聖戦」はない、正しい戦争はないのです。あの日からの「戦後」を続けなければなりません。

私は厚い手紙の束をにぎりしめてしまいました。

(あまん きみこ／児童文学作家)

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

魅力的な

校長先生と

子どもたち

小松崎進

こまつぎき すすむ／この本だいきの会代表。小学校教師を勤め、のち東京学芸大学などで講師。著書に『この本だいき！』『この絵本読んだら』（共に高文研）、『かたり・読みがたりだいき』こま先生（文溪堂）など。



宮川ひろ／作 林明子／絵

しばらく小学校低・中学年の担任だったので、久しぶりに五年生の担任になった時のことです。

教師の仕事はいろいろありますが、わたしはその一つに、本の読み聞かせ（現在は、読みがたりというこぼを使っています）があると思ってきました。というのは、すべての作品によって、子どもたちのこころとこぼが育てられるからです。

その年も、さて、目の前の子どもたちに何を読もうかなと思っていた時、『びゅんびゅんごまがまわった』と出会ったのです。

この絵本に出てくる校長先生の存在感。そして、子ども集団との関係のおもしろさに、ぜひ子どもたちに読んでみようと思いました。音読してみても、その思いをさらに深くしました（私は、くりかえし音読してみても、子どもたちへの読み聞かせの可否を決めていました）。

あそびばのかぎを開けてほしいという子どもたちに、びゅんびゅんごまがまわせるようになったら頼みをきこうと答える校長先生。しかし子どもたちがひとつこまをまわせるようになると、今度はふたつ、みつつ同時に先生は挑んでくるのです。

子どもたちは、この変わった校長先生をどう感じ、どう思うだろう、この絵本に登場する子どもたちをどう思うだろうか等々、興味津々でした。

校長先生と言えば、こんなことがありました。低学年の担任だった時、週一回、子ども二名で、校長室へ行って何か話を聞いてくることにしたのです。

子どもたちが休み時間、運動場へ出てくたさいと

お願いしてみたら、実際、二十分の休み時間に運動場に出られて子どもたちと遊ばれた校長先生もありましたが、長い教師生活の中でお二人でした。それも、年数回でした。

そういう状況の中で、絵本の校長先生は、なんと子どもをひきつける魅力のある先生でしょう。

さて、わたしの受けもった五年生。絵本を読むと、「おもしろい校長先生だね」

「ほんとうにいるかなあ！ いたらいいなあ」

「こんな校長先生がいたらおもしろいよ」

「いいよ」

「いるかもよ、学校はいっぱいあるんだから」

「ほかの先生、どうして出てこないの？」

「校長先生と五、六人の子どもたちの話だからじゃないの！」

「そうかなあ」

と、話はいつまでも続きました。

もう一つ、「ほかたちも『こままわし』やってみようよ」の声。

だれが持ってきたか覚えていませんが、こまをつくったり、遊び始めたりで、教室はたいへんにぎやかになりました。作品の子どもたちと同じで、四つと遊びはどんどん増えていきます。

作品が実生活の中で生きていく、とてもいいまじょうか、しばらくの間、子どもたちの遊びの中心は「こままわし」でした。そして、「あの校長先生おもしろいよね」のこぼが、いつまでも出たのです。



私は沖縄県那覇市首里で一九三八年三月に生まれました。今、七十九歳です。四二年、四歳の時に両親と共に大阪へ移りました。両親から幼い時のことを聞いていなかったのが何月だったか忘れませんが、乗った船の底が大部屋で暑かったことを覚えています。

その頃、沖縄はまだ平和でした。四一年十二月、日本軍が真珠湾を攻撃して太平洋戦争が開始され、緒戦は勢いの良かった日本軍も翌四二年八月、ミッドウェイ海戦で大敗、米軍はガダルカナル島に上陸、反攻作戦を開始していました。

後に私もガダルカナル島へ行ったことがあります。多くの日本兵が戦死、餓死した島です。四三年四月、山本五十六大将戦死、五月、北のアッツ島の日本軍も全滅。南では米軍を主力とした連合軍が八月にニューギニアに上陸するなど戦況は緊迫していました。

四三年九月、日本軍は統治していたサイパン・テニアン・グアムなど南洋群島ほかを絶対国防圏として、後方の沖縄各

私と沖縄

石川文洋

いしかわ ぶんよう
報道カメラマン。65年から戦場カメラマンとしてベトナムに滞在、朝日新聞社に勤務のちフリーに。著書に『カラー版 ベトナム 戦争と平和』（岩波新書）、『戦場カメラマン』（朝日文庫）ほか多数。

地に飛行場をつくって支援しようとした。それでも日本軍が劣勢になっていくことは国民に知らされず、沖縄の人たちものんびりしていたのです。

沖縄に戦争の危機が押し寄せてきたのは四四年三月に新設された沖縄守備軍第三十二軍が、七月から続々と沖縄に送られてきてからです。十月十日に米軍によって激しい空襲を受け那覇市の九〇%が焼失しました。

すでに七月にサイパン、八月にテニアン、グアムの日本軍が全滅し、戦況は風雲急を告げていました。私も後にこの三島を取材しました。南洋群島に住んでいた約七万二千人の日本人のうち五万七千人が沖縄人で、そのうちの一万二千八百二十六人が犠牲となりました。サイパンのバンザイ岬から飛び下りるなど、沖縄戦の前に集団自決が始まっていたのです。

政府は四四年七月、沖縄の老幼婦女子八万人を九州、二万人を台湾へ疎開させる閣議決定をしました。そして八月、小学生たちが乗った対馬丸が米軍の潜水艦

の攻撃で沈没。七百七十五人の子もたちが死亡しました。兄が乗った船は無事に到着したので、船橋市の国民学校一年生だった私は母に連れられて空襲の中を鹿児島まで兄を迎えに行きました。

二男の私は母方の家を継ぐために中学校卒業までは安里姓で通学していました。名前が珍しいので学校ではすく「オキナワ」というあだ名がつけました。兄が病気になるので高校から石川姓になりました。

私が住んでいた千葉県船橋市で沖縄が米軍の上陸を受けたことを知りました。しかし、まだ幼かったので、多くの市民が犠牲となった悲惨な状況の詳細まではわかりませんでした。沖縄戦の結果を実際に目にしたのは高校を卒業した五七年、十五年ぶりに帰郷した時です。米軍の激しい攻撃で廃墟となった首里や各所には粗末な住宅が建っていました。そして巨大な基地の中には広い庭のある米兵住宅が並んでいました。私を可愛がったという母方の祖父は六十歳で防衛隊員となり



サイパンの「おきなわの塔」の前で、南洋群島で戦争の犠牲となった1万2826人を慰霊するエイサーの舞い(1999年7月5日)



ベトナム爆撃へ嘉手納基地から発進するB52爆撃機(1969年2月)



辺野古新基地建设に反対してキャンプ・シュワブ前に座り込んだ人々を排除する機動隊(2015年11月19日)

戦死しました。

「ご存知のように沖縄は、一八七九年、明治政府によって沖縄県として日本に併合されるまでは独立した琉球王国でした。併合後六十六年で沖縄戦となったのです。琉球国のままで日本の守備軍が配置されなければ沖縄戦にはならず、約十二万人、四人に一人という沖縄人の犠牲もなく、島は破壊されなくて首里城ほか文化財も失われなかったと私は考えています。現在の米軍基地は沖縄戦の大きな後遺症です。

その後、私はベトナムへ行き四年間、米軍とサイゴン政府軍に同行し撮影をし

ました。米軍のベトナム農村に対する攻撃はすごいものでした。爆撃、砲撃、機銃掃射、戦闘部隊による農村侵入。この攻撃を見て私は沖縄戦もこのようにして大勢の民間人が殺されたのだろうと思いました。又、沖縄の基地がベトナム戦争に大きく利用されていることを知り心を痛めました。

ベトナムから帰って沖縄の本土復帰に関する取材を始めました。私も復帰には大賛成でした。当時、沖縄、本土間の往復には米国政府許可のパスポートが必要で、その入手が困難でした。革新政党に

る人のなかにはパスポートが得られず、沖縄へ行けない人、沖縄から出ることでできない人が大勢いました。沖縄で使用されているお金はドルでした。

本土復帰すれば、日本の法律の元で基地は縮小され米兵の犯罪も減少するのではないかと、経済も上がるのではないかと皆「本土並み」になることを願いました。しかし、復帰すると同時に日米安保条約が適用されることになり、基地はそのまま残りました。

私は一九七二年五月十五日、復帰の日二十四時間を撮影しました。そして今年五月十三日から十六日まで四十五年後

の沖縄を回りました。

いまでも米軍基地は日本全体の七〇%超が沖縄に存在し、新たに辺野古新基地を建設しようとしています。経済は日本の最下位、失業率はトップです。米兵の犯罪も無くなりません。私たちが辺野古を含めた基地に反対しているのは、沖縄の基地が利用されて再びベトナム戦争のように多数のアジアの同胞が殺されるようなことがあってはならないし、強力な基地が存在することによって、戦争になつた場合攻撃を受ける危険が大きくなるからです。

基地のない平和なふる里を願っています。

ひらげば、二冊がぴっかぴか

長谷川 知子

スーパーに行く途中、ちょうど宅急便の人に会って〈それ〉を受け取りました。スーパーのベンチで急いで開けて見た〈それ〉は、第7回・第8回の絵本テキスト大賞を受賞した『マスク』と『バステいよいよ』の校正刷りでした。

絵本テキスト大賞は、絵本作家の発掘と育成を願って、毎年、日本児童文学者協会と童心社が主催しているもので、絵本の文〜ことば〜だけを審査します。大賞に選ばされると、素敵な画家さんたちの絵がついて絵本として出版されるのです。

第7回・第8回は、私が選考委員を務めました。私にとって初めてのことで、公募で何百通と来る原稿、全部読んでちゃんと選考できるかちょっと不安でした。でも大丈夫。選考にご一緒した児童文学作家の丘修三さん、内田麟太郎さん、童心社の編集者さんらが頼もしかった。

そして、文だけで選考した受賞作に絵がついて、まだ未完ながら、絵本としていま私の目の前にあるのです。表紙の絵を眺め、ページをめくりながら「おお！ 2冊ともいいんでないの!!」と思わず声が出ました。新鮮でなんだかうれしい。

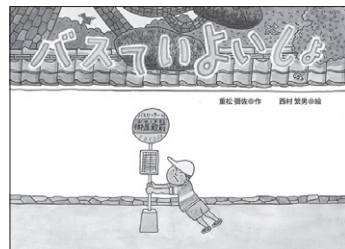
『マスク』は、絵本にしたらおもしろそう、自分が描いたらどんな絵本になるかな、なんて思いながら選んだテキストでした。絵は林なつこさん。表紙のふたくんと水玉模様のマスクがぱっと人目を引きまします。自分の鼻が好きではなく、マスクで隠そうとするふたくん。そこにつぎつぎとやってくる動物たちのやりとりが愉快です。わたしはわたし、ぼくはぼく。みんな違っていいんだよね。いい仲間たちでよかったね。

『バステいよいよ』は、西村繁男さんの絵。テキストを読んだとき、話はおもしろいけれど、主人公のしんごくとバス停の前に現れる、駕籠かきや、浪人者、お姫様など、江戸時代にタイムスリップしたような登場人物がどうシンクロしていくのか、今ひとつイメージできませんでしたが、そこはさすが西村さん。軽妙洒脱な筆致で、ちょっとシュールな世界。やってくれましたね。どうしてもバス停を移動させたいしんごくん。しんごくんのおばあちゃんに対するやさしさがみんなを動かしたんだね。

絵本は、文と絵のコラボレーションです。絵は文を説明しない。文は絵を説明しない。ことばが語る、絵が語る。1冊の絵本は、そうして何倍もおもしろいもの楽しいものになって生まれていく。それが絵本の妙味かな。(はせがわ ともこ/絵本作家)



「マスク」
福井智/作
林なつこ/絵
本体価格1300円＋税



「バステいよいよ」
重松彌佐/作
西村繁男/絵
本体価格1300円＋税

BOOK

こわ〜い地獄のゆかいな冒険 大島 清昭



「じごくにいったかねどん」
常光徹／文
かつらこ／絵
本体価格1300円＋税

地獄は、悪いことをした人間が、死んだ後に落ちるといわれる場所です。日本の文献ではじめて地獄思想が登場したのは、平安時代初期の『日本霊異記』といわれています。しかし、日本人の地獄イメージの元になっているのは、寛和元年（西暦985年）の『往生要集』でしょう。この仏教書には、各経典から引用した恐ろしい地獄の様子が、リアルに表現されました。『じごくにいったかねどん』に出てくるのも、こわ〜い地獄です。鬼たちに責められる亡者、炎に焼かれる亡者、血の池、針の山、火車、巨大な籠など、地獄の様子が大迫力で描かれています。

その地獄で、死者の罪を裁くのが、エンマ大王です。鬼たちの上司だけあって、こちらも怖い顔をしています。ただ、この本でエンマ大王から地獄行きを宣告されるのは、佐賀県唐津市の笑話の主人公かねどんですから、おとなしく裁きに従うはずありません。持ち前のとんちを發揮して、あの世でも難局を乗り越えます。ユーモアあふれるかねどんも魅力的ですが、エンマ大王が見せるゆかいな姿も見どころのひとつでしょう。

また、こわ〜い地獄だけではなく、天女たちが舞い、花々にあふれ、ごちそうがならび、笑顔が輝く、極楽の美しい様子も必見です。

さあ、かねどんと一緒に、あの世めぐりに出発しましょう！

（おおしま きよあき／妖怪研究家）

祝

「第五十五回五山賞奨励賞」受賞！



おひるねですよ
内田麟太郎／脚本
市居みか／絵
本体価格1900円＋税
〈文部科学省選定作品〉

教育紙芝居の生みの親、高橋五山の業績を記念してもうつけられた「五山賞」。一年間に出版された紙芝居の中から、優秀作品に贈られる五山賞奨励賞に、『おひるねですよ』（内田麟太郎／脚本 市居みか／絵）が選ばれました。

受賞のことば

内田麟太郎



撮影：田中丸豊次

奨励賞の奨励は、激励というほどではないらしいけど、やはり「がんばりなさい」と辞書にはあった。「よし、がんばるぞ」と叫んだら、もう七十六歳だから、ほどほどにいなさいと、カミさんにいわれた。たしかにそうである。しかし、考えようによっては、これ青春でもある。わたしは嬉しい。

市居みか



この度は素晴らしい賞をありがとうございます。『おひるねですよ』は、内田さんのオノマトペが楽しい作品。紙芝居にぴったりの音。でも、これを絵にすると？ 文字を入れるのも芸がないし、もっと見て楽しい方法は？ と編集の西尾さんと相談し、いろいろな色の図形になりました。絵で音の楽しさが伝わればいいなと思います。

8月の新刊紙芝居！

童心社創業60周年記念出版

松谷みよ子かみしばい 民話傑作選

松谷みよ子が手がけ、のこした民話紙芝居のすぐれた脚本は、松谷民話の〈語り〉の結晶です。新たな画家との出会いが豊かな物語世界をさらに輝かせます。

○全6巻 セット定価／本体14,100円＋税 ○各定価 12場面／本体2,300円＋税 16場面／本体2,600円＋税

やまんばのにしき

松成真理子／絵 (12場面)



天人のよめさま

梅田俊作／絵 (12場面)



ばけくらべ

和歌山静子／絵 (12場面)



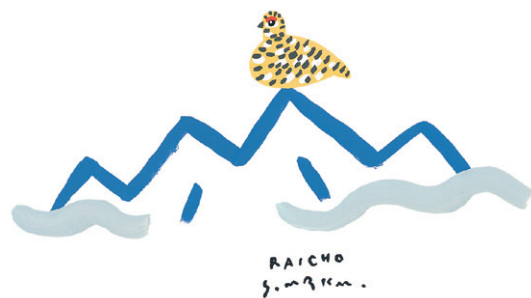
さるとかに

西巻茅子／絵 (16場面)



まえがみたろう 前編・後編

スズキコージ／絵 (各12場面)



「母のひろば」へのご意見・感想のほか、子育てで日々感じていること、子どもたちの活動などについても、お便りをお寄せください。送り先は下記、童心の会宛でお願いいたします。
*お便りを誌面で紹介させていただくことがあります。その際には編集部で選んだ絵本を一冊差し上げます。

お便り、お待ち、しています。

2017年8月15日発行 (毎月刊)
母のひろば 第639号
定価50円 (年600円／送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03 (5976) 4402
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<http://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●あまん先生の「北風をみた子」のラスト近く、家族で月夜の土手道を歩く場面での台詞——「お月さん、川の中がたのしくて、わらってはるみたい」 厳しい状況で生きる少女を描く作品ですが、川面の月を「わらってはる」と思えるしなやかさ。重い現実もきちんと受け止める毅さと、幼子の柔らかな感性を併せ持つのが、あまん作品ではないでしょうか。◎

●先月より童心社へ移り、本誌の担当になりました。オフィス街と比べ住宅街の社屋には不便感じますが、代わりに地域との交流がありました。家族・地域経営のお店でお昼を頂き、保育園へ紙芝居の試演に伺い、イベントには親子連れがよちよちと階段を登って来てくれます。それぞれの家族の日常に思いを馳せながら、本作りに取り組んで参ります。▲